

酷暑と豪雨が 問いかけるもの



熊本県立大学長 **堤 裕昭**
Tsutsumi Hiroaki

今年の夏の酷暑には、多くの方が閉口されたのではないのでしょうか。さらに、8月上旬の戻り梅雨のような大雨では、家屋の浸水や土砂崩れ、農地の水没など、さまざまな被害が発生しました。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

この出来事を通じて、私自身、長年の疑問が1つ解けました。なぜ毎年九州各地で梅雨末期になると集中豪雨や洪水が繰り返し発生するのかということです。令和2年7月に熊本県南地域を襲った豪雨も、まだ記憶に新しいところです。7月になると西日本の気温や沿岸の海水温が上昇し、大量の水蒸気が発生します。その結果、6月までとは比較にならない規模の積乱雲が発達します。雲は水蒸気の塊です。それが夜間になると冷されて結露し、大量の雨粒となって地上に降ってきます。集中豪雨が夜に発生しやすいのはそのためです。避難

が難しい時間帯に災害が起きる要因の一つと言えるでしょう。

私たちが地球上でエネルギーを使い過ぎていることが影響しているのでしょうか。メカニズムのすべてが明らかになっているわけではありませんが、気候の温暖化が進んでいることは誰もが実感していることでしょう。今年の暑さは一過性の出来事ではなく、これからも続く変化の一部と考えざるを得ません。このような気候の変化に適応しつつ、私たちはこれまでと同様の日常を維持していく必要があります。そのために大学という学びの場で大切なのは、「気象」や「気候変動」について学ぶこと、あるいは学び直すことではないでしょうか。世の中は常に変化しています。その中で生きていくためには、その時々に必要な学びを続けること(教養を身につけること)が求められます。